

平成 23 年度 核兵器廃絶平和都市宣言事業

「中学生による広島市訪問事業」

文 集



原爆ドーム前にて

会 津 若 松 市

はじめに

会津若松市は、昭和60年8月6日に、日本国憲法の平和精神に基づき、核兵器の廃絶を誓う全世界の人々と相携え、永久平和確立のため、「核兵器廃絶平和都市」を宣言いたしました。以後、「広島・長崎原爆被災写真パネル展」や「平和推進フィルム上映会」を開催し、宣言塔や広告板を設置するなど、様々な事業を実施しています。

この事業の一環として、今年度も市内中学生の代表による原爆被災都市広島市の訪問を実施しました。

平和記念公園、平和記念資料館等の見学、平和記念式典への参列やさらには、被爆体験者「中西 巖」さんの証言講和をとおし、戦争や原爆がもたらした深い悲しみと癒えることのない心の傷を真摯に受け止め、命の尊さや平和への願いを心に刻みました。

その想いを感想文としてまとめましたのでご覧ください。

目 次

広島市訪問事業に参加して	会津若松市立第一中学校	竹俣 美里 ……	3
広島訪問に参加して	会津若松市立第二中学校	星 栄成 ……	4
広島訪問	会津若松市立第三中学校	小林 瞳 ……	5
広島訪問を終えて	会津若松市立第四中学校	村岡 亜美 ……	7
広島訪問	会津若松市立第五中学校	鈴木 碧海 ……	8
広島訪問をふりかえって	会津若松市立第六中学校	原 隆太 ……	9
平和について～広島を訪問して～	会津若松市立湊中学校	渡部 琴美 ……	11
広島を訪問して	会津若松市立一箕中学校	小川 昌人 ……	13
「広島市訪問事業」に参加して	会津若松市立大戸中学校	芳賀 優大 ……	15
「広島訪問をして」	会津若松市立北会津中学校	酒井 美幸 ……	16
広島市訪問事業を終えて	会津若松市立河東中学校	山田 博久 ……	17
広島で学んだこと	会津若松ザベリオ学園中学校	曾我 由芽子……	19
感想	福島県立会津学鳳中学校	安齋 葵 ……	20

広島市訪問事業に参加して

会津若松市立第一中学校 竹俣 美里

六十六年前の夏、原子爆弾は二つの都市で多くの人々の大切な命と未来を奪いました。

私はその一つである広島で、三日間核兵器や平和について学び、考えてきました。

被爆体験講和では、実際に原爆を体験された中西巖さんに、とても衝撃的なお話をしていただきました。生き残った被爆者は、周りから差別を受け、さらに「がん」になる確率が三倍にもなるため、何が起こるかわからない不安を毎日抱えながら精一杯生きようとしていたそうです。このところを知り、原爆の恐ろしさを改めて学ぶことができました。

私は今回の経験を通して、改めて核兵器廃絶を世界に訴えていかなければならないと感じました。

現在、福島県そして会津若松市でも、震災によって原発被害などを受けています。そのためこれからは、核兵器廃絶と共に、原子力を必要としない未来をつくるために今出来ることを、より一層深く考えていくべきだと思います。

広島訪問に参加して

会津若松市立第二中学校 星 栄成

大きな川の先にそびえ立つ原爆ドーム。それは、僕の想像をはるかに超える迫力と悲惨さを表しており、戦争が起こした深い悲しみを一瞬で訴えられたような気がしました。

今から六十六年前の八月六日、午前八時十五分。世界で初めて広島に一つの原始爆弾が投下されました。その被害は半径五キロにも及び、多くの尊い命が奪われました。資料館には、原子爆弾によって粉々になった瓦、ボロボロになった服、焼けただれた皮膚、川に連なるように浮かぶ数えきれないほどの死体など、目を背けずにはいられないたくさんの展示物ばかりで、改めて戦争、原子爆弾の恐怖を思い知ることとなりました。

しかし、この広島で起こった出来事は過去のことで終わらせる訳にはいかず、今現在の僕たちには関係しています。

三月十一日の大震災により、東北に大きな被害をもたらしました。核分裂によって得られるエネルギーで、関東に電気を供給してきた福島原子力発電所は異常をきたし、今でも多くの人とその放射能におびえる日々を過ごしています。

原発と原爆というものの影響を身をもって知った今の僕達は、現実をしっかりと受け止め、その事実を「伝える」という大きな責務があると感じます。そして、世界のリーダーとして、核兵器のない世界、原子力に依存しない社会の実現に向け歩んでいかなければならないのではないのでしょうか。

この度はこのような貴重な経験を与えて頂き、本当にありがとうございました。

広島訪問

会津若松市立第三中学校 小林 瞳

「8・6ヒロシマ、8・9ナガサキ、3・11フクシマを忘れるな。」平和式典当日の平和公園にはたくさんの看板が並んでおり、その中でこの言葉を見つけました。66年前のあの2つの惨劇と福島で今年起こった福島第一原子力発電所の事故が、肩を並べて広島に掲げられていました。私は福島の事故といっても、会津への影響がほとんどないため、他人事のように思っていました。しかし福島から遠く離れた広島の方たちは違いました。66年前、放射能の恐怖を経験している広島では、今回の福島の事故で当時を思い起こさせられる辛く悲しい出来事だったのです。複雑な気持ちを抱えたまま私は平和式典に参列しました。色々な方の話を聞いているとき、2日目に訪れた平和公園や資料館のことを思い出していました。

平和公園ではボランティアの方の説明を聞きながら見学しました。その説明の中で一番印象に残っていることは、広島に平和公園にマザー・テレサがきたときの話しです。

マザー・テレサに平和公園について説明している方がこんなことを言いました。「あの爆弾で多くの方が生き埋めになってしまいました。救出されずに今もこの下で眠っている方がおられます」これを聞いたマザー・テレサはすぐに靴を脱ぎ、裸足になりました。この下にも人が眠っていると聞いて、その上を靴で歩いてはいけないと思ったのでしょうか。私はこの話しを聞いたとき、マザー・テレサがそのような行動を取ることを、想像もつきませんでした。この下に人が眠っていると聞いても全くなんの行動も考えることができませんでした。そんな自分に無償に腹が立って涙がこぼれました。一步一步歩くたびに申し訳なく思いました。

午後には平和資料館を見学しました。このような悲惨な出来事が、66年前に本当にこの賑やかな今の広島で起こったのかと疑ってしまいました。被爆体験講話でも、生々

しい話を聞き、胸が苦しくなりました。

広島を訪れた最終日の平和式典では、広島で学んだ2日間のことが鮮明に思い出され悲しくなりました。しかしこの悲惨な出来事をしっかりと会津に持ち帰り、みんなに伝えようと強く思いました。またこのような惨劇を繰り返さないためにも、多くの人に66年前の事実を知ってもらいたいと思いました。

私は今回、広島に行くという貴重な体験をさせていただきました。今後、一つでも多くのことを家族や友達、三中生に伝えたいと思います。

今回は本当にこのような体験をさせていただきありがとうございました。

広島訪問を終えて

会津若松市立第四中学校 村岡 亜美

今回の広島訪問を終えて、私は二つの事を考えました。

一つ目はやはり「原爆のこと」です。私は平和公園で原爆ドーム、平和記念館などを見て来ました。私は六年生の時にも原爆ドームなどを見たことがあったのですが、二回目だということも忘れるほど、原爆に恐ろしさと怒りを感じました。そして人は、やろうと思えばこんなにも残酷に同じ人を苦しめられるという事実を知るたび、核より人が怖くなりそうで鳥肌が立ちました。核所有国をはじめとする全世界の人々には、命の尊さを忘れないでほしいと思います。

二つ目は「広島の人々の強さ」です。原爆を落とされ、自分の家族、友達、家、故郷を一瞬で失った広島の人たち。本当はそのことを思い出したくないと思います。それでも、今回お話ししていただいた中西さんをはじめとする多くの方が、「この世界から被爆し、苦しむ人をもう出したいくない。」という願いのため、つらい記憶と真正面から向き合って活動していました。福島も三月に起きた震災で多くの方が亡くなり、また、原子力発電所からの放射線に今も悩み、苦しめられています。今はまだ向き合えないかもしれません。ですがいつか、そのつらい記憶と向き合い、それをしっかりと受け止め、核の恐ろしさを未来へと伝えていかななくてはいけないと思います。そして核廃絶へ向けて広島、長崎と協力して日本だけでなく、世界へ呼びかけていくことが私たちに与えられた使命だと思います。

私は、今回の広島訪問を一生心にとどめ、今自分がすべきこと、やらねばならないことをきちんと考え、自分が今こうして生きていることに感謝して生活していきたいと思いません。

最後に、今回の広島訪問は私にとって一生の思い出になりました。私にお声をかけてくださり、本当にありがとうございました。

広島訪問

会津若松市立第五中学校 鈴木 碧海

広島訪問は私にとってとても良い思い出になりました。

平和記念公園と資料館では、原爆の恐ろしさやいろいろな建造物の意味などを知ることができました。中でも心に一番残っているのは、手で火を持っているところをモチーフにしたオブジェです。この火は、世界中から核が無くなったときに消えると言っていました。

雨や風に負けないで燃やし続けているのは、大変だと思いました。でもいつか世界から核がなくなれば消せるので、一日でも早く消せるようにしてほしいと思いました。また、資料館の中の写真や展示物はどれも目を背けたくなるようなものばかりでした。

被爆者の中西さんの講話は、被爆した人にしか分からない気持ちや悲惨さを詳しく教えてもらいました。

そして平和の式典では、もくとうをしたり、平和宣言を聞いたりしました。あのときの緊張感と、人の多さは忘れられません。

私はこの訪問に参加して、貴重な経験ができて良かったです。広島には簡単には行けません。なにより式典にはなかなか参加できません。

私は、この訪問で学んだことを学校の代表としてみんなに伝えたいと思います。また、他の学校の人たちとよい交流をもつことができ楽しい時間を過ごすことができました。

この訪問に参加する機会をつくってくださりありがとうございました。

広島訪問をふりかえって

会津若松市立第六中学校 原 隆太

八月四日、五日、六日の広島訪問を通じていろいろな事を学びました。私が六中代表として、広島に訪問させて頂ける事になった時は、とてもうれしい気持ちになりましたが、しかしその反面、

「自分が学校代表で広島へ行き、しっかり学んで報告することが出来るのだろうか？」

という不安もありました。説明会の時に、知っている人が一人しかいなかったのでいろいろな人と、どうやって話しかけていこうと考えました。しかし出発当日は皆さん方優しく接して下さったので、三日間楽しい旅になるなと感じました。広島につき、初めに宮島を参拝しました。実際に見るのは初めてで意外に大きいな～と思いました。夜の宮島の海は、高潮になっていて、昼間歩いていた所が海になっていてびっくりしました。遊覧船は楽しい時間でした。二日目は訪問の目的でもある平和記念資料館に行き、ガイドさんのお話を聞いたり、やっと念願の原爆ドームを見る事が出来ました。第一印象は「ボロボロ」だと思いました。こんなにも核の力で多くの人が死に、建物は壊滅的な被害を受けたというのが一瞬で分かる建物でした。次に被爆体験講話で、中西巖さんの話を聞きました。熱風は遠い所でも一〇〇〇度と聞き、自分たちは夏の三十四・三十五度でさえとても暑くていやなのに、一〇〇〇度とまでなると、予想がつかいません。巖さんが言っていた言葉の中に

「なぜ核を作ったのか？」

「なぜ人々は殺しあうのか？」

「なぜ戦争をするのか？」

「平和の原点は人間の心と心のふれあい。」

本当にその通りだと思いました。人間同士で争いをしなければ、核を作る事がなかったし、多くの人も死ぬ事が無く、悲しい大事件は決して起こらなかったと思います。そして

「平和」今この言葉が世界で一番必要な言葉ではないのでは、と思いました。

三日目の平和祈念式ではとても暑かったです。式内での一番印象が大きかったのは、子供代表が話した平和への誓いの中で、

「未来を作るのは人間です。喜びや悲しみを分かち合い、あきらめないで進めば、必ず夢や希望が生まれます。」

とても今大切なことを話していたなと共感し、自分も平和のために少しでも力になりたいなと思いました。

今思えば、三日間はとても短い時間でした。このメンバーで行動し、とても貴重な時間を体験する事ができました。また何かの機会に皆さんと会える日を楽しみにしています。

この広島訪問に参加させて頂き、ありがとうございました。

平和について～広島を訪問して～

会津若松市立湊中学校 渡部 琴美

今回の広島訪問に参加することになり私は平和とは何かについて考えました。

今年、三月十一日に起きた東日本大震災による福島原子力発電所の事故。目に見えない恐怖におびえる毎日を今も過ごしています。

「原発」と「原爆」この二つの共通点は放射能という目に見えない恐怖の物質でした。

六十六年前の八月六日。広島に一発の原子爆弾が投下されました。一瞬にしてたくさんの人々が焼け死に、肌が溶け、水を求めて亡くなっていきました。何も知らずただいつも通りに生活していた人々が、罪のない人々が、原子爆弾によって命を奪われ、一瞬にして広島は地獄のようになりました。母親を亡くした子供、友達、家族を亡くした人もたくさんいました。生き残った人も放射能の後遺症によって今も何千人という人達が亡くなっていきます。

そんな中、被爆体験をした中西さんの話を聞きました。その話は、友達を失った悲しみ、火傷で苦しんでいる人を助けられなかったという辛さ。言葉では伝えきれないくらいの思いを感じ取ることができました。中西さんの「核と人は共存できない。」という言葉に私も共感しました。

人は何故、戦争をするのでしょうか。戦争が生むものは平和ではなく、悲しみと苦しみだけだと皆、知っているはずなのに・・・。

私達は、これから広島で起きた悲しい出来事を後世に伝え、東日本大震災で起きた原発事故に立ち向かい、核の恐ろしさ、共存できないということを踏まえて、復興のために皆で力を合わせていきたいと思います。

私は、平和とは人と人との心が触れ合い、誰も傷つくことのない笑顔溢れる日々こそが平和だと思います。今はまだ、完全な平和だとは思いません。これから先の未来、本当の

平和が来るように中学生である私達から行動していきたいと思います。

広島を訪問して

会津若松市立一箕中学校 小川 昌人

今年の夏は、僕にとって特別な夏になりました。

僕は八月四日から六日の三日間広島市訪問事業に参加しました。毎年この時期はテレビなどで戦争や原爆のことが報道されますが、それはあまりにもむごく悲惨な出来事であり、恐ろしくいつも目を背けていました。しかし、今年は三月十一日の東日本大震災、さらに重大な原発事故がありました。戦争に使われた原子爆弾と平和目的で利用される原子力、どちらも同じ「核」を使っています。今回の原発の事故で大変な生活を送っている人たちが身近にいて、僕たちの生活の中で影響のある「核」とはどのようなものか知りたいと思いました。

六十六年前の八月六日午前八時十五分、広島に一発の原子爆弾が投下されました。その瞬間、人々の当たり前の生活が爆風などにより一瞬にして奪われ、何十万人もの尊い命が失われました。また半世紀以上経ってる今なお放射線による病気などで苦しんでいる人たちも数多くいます。平和記念資料館を見てまわったとき、僕は言葉を失いました。八時十五分で止まった時計、ボロボロに破れた学生服、全身にやけどを負った人の写真、とても現実にあったこととは思えませんでした。しかし被爆者の中西さんという方から話を伺った時、それはまぎれもなく実際におきた事で、その現実から目を背けてはならないと思い知らされました。中西さんの一言一言は、その時の悲惨な状況を生々しく、僕の胸にひしひしと伝わってきました。中西さんは同じ出来事が繰り返されぬように、思い出したくないようなつらいことも必死にこらえ、平和を願い活動し続けています。

僕は改めて、核の恐ろしさと広島の方々の苦しみや悲しみを実感しました。原爆は何にも罪のない多くの人たちを無差別に殺し、今なお被爆者の方々を苦しめています。福島も同じく今原発によりつらい思いをし、放射能汚染への不安を抱えています。中西さんが

おっしゃっていたように僕たちも被爆者なのです。これ以上同じ思いをさせぬように僕たちが後世に語り継ぎ、核廃絶を訴え続けなければならないと強く思いました。

「広島市訪問事業」に参加して

会津若松市立大戸中学校 芳賀 優大

「中学生による広島市訪問事業」に参加し原爆について学んできました。

まず、原爆ドームを見学し戦争の悲惨さを感じました、原爆はドームのほぼ真上の五百八十メートルで爆発し、ものすごい勢いで広い範囲に被害を与えました。一瞬で広島を焼け野原にしたと言うことに言葉にならない程驚きました。そして、資料館を見学した中で一番印象に残っているものは、爆発後の場面で皮膚が垂れ下がった人の再現があり、それを見たときは恐ろしかったです。また、資料館の中にいた係員の人に「原爆ドームは唯一、鉄筋じゃないレンガ造りの建物だ」と聞き、レンガ造りなのに原爆の衝撃に耐え残ったのはすごいことだと思いました。

次に、被爆体験者の中西さんの話を聞き当時は大変だったんだなあと思いました。話しによると、爆発した直後は目が眩むくらいの光で、爆風も強く中西さんは風で飛ばされたと聞き、人が飛ばされるくらいの風はどんな強さなんだろうと考えました。また、傷を負った人達を介護していた人も介護被爆してしまうことに驚き、そんなこともあるんだと思いました。さらに「被爆してから何年もしてから病気になってしまう」と聞き、改めて放射線の恐ろしさを感じました。

そして中西さんの話を聞き、平和の大切さを改めて考えさせられました。戦争は人をただ殺すだけなので戦争をしてはいけないと思いました。二度と、核兵器などを使った戦争が起きないためにも世界から兵器を無くすことが出来れば世界は平和になると思いました。そして世界から兵器を無くすことを受け継いで行くことはとても大切で戦争は繰り返してはいけないことだと、今回の広島訪問で学びました。戦争は終わったが、歴史上に残る原爆の傷跡になってしまったのは、とても悲しいことだと思いました。

今回の体験で得たことを忘れずに、平和に過ごしていきたいと思います。

「広島訪問をして」

会津若松市立北会津中学校 酒井美幸

私は広島訪問を通してたくさんのことを学びました。まず一つ目に、今自分が生活している日常を大切に思うことを学びました。広島に原子爆弾が落とされ、助かった人々は食料や住む家のない中で生活してきたと聞きました。現在の私たちには、食料にも恵まれ住む家もあります。この生活を当たり前思わず一日一日を大切に過ごしていこうという思いになりました。また、食べ物を無駄にすることがないようにしようということも思いました。今あるものを大切にしていかなければいけないということも学びました。

二つ目に学んだことは、核兵器の怖さを知りました。正直言って、広島を訪問するまで核兵器がどれだけ怖いものか、あまり実感がありませんでした。しかし、広島を訪問して核兵器の怖さを学びました。原子爆弾は一瞬にして、多くの人々の命を奪い大切なものをすべて奪っていきました。また、当時は生き延びた人でも、被爆したせいで、何年々後や数十年後に病にかかり亡くなってしまう人が多くいた、ということも聞きました。核兵器はとても怖いものだと思います。核兵器さえなければ、亡くなった人々は今でも元気に生活していたかもしれないと思うと悲しい気持ちでいっぱいです。

私たちにできることは、広島や長崎のような同じことが二度とおこらないように、この体験を多くの人々に伝えていくことが大切だと思います。より多くの人々に核兵器の怖さや日常の大切さを知ってもらえれば良いと思っています。広島を訪問することができて、よい体験になりました。これからの日常生活を、一日一日を大切に過ごし、そして感謝しながら生活していきたいと思っています。

広島市訪問事業を終えて

会津若松市立河東中学校 山田 博久

僕は、今回河東中学校の代表として四日～六日の広島市訪問事業に行きました。この会津若松市も「核兵器廃絶平和都市」を宣言していますし、僕自身も、広島の悲惨な悲劇をこの目でしっかりと見て、今後このような悲しい出来事が実際にあった事、そんな事が今後絶対に起きてはいけないという事を、語り継いでいきたいと思いました。

この体験を通して、僕はとてもいろんなことを学びました。その中で一番印象に残っている中西巖さんの被爆体験講話がとても心に残っています。当時巖さんは旧制中学校四年生であった十五歳の時、恐ろしい悲劇にあってしまいました。

その日巖さんはいつものように爆心地から二千七百メートル離れた動員先の工場で作業に出発するために、倉庫の裏のちょうど真ん中の隅で待機していたそうです。いつもは八時ごろに迎えのトラックが来るはずだったそうですが、その日は何分待ってもなかなか来なかったそうです。トラックを仲間の人たちと待っていると、突然青空が「ピカッ！」と光ったそうです。その瞬間巖さんは気絶してしまったそうです。

巖さんが気がつくと、体は地面に倒れるような形でいて、七～十メートルほど吹き飛ばされていたそうです。辺りは煙でよく見えず、他の人たちのうめくような声が聞こえたそうです。仲間に近寄ってみると、体が血だらけの人や、真っ赤になっていたらしいです。巖さんは自分はどうなっているのかと自身の体を触ってみたところ、不思議と何にもなっていないなく、巖さんのいたところがちょうどエアポケットのようになって千度や二千度もある熱風から守ってくれたらしいです。その後は大やけどをした人たちが倉庫にやってきて、薬も何もないので、巖さんは体に油を塗ってあげることはできなかったそうです。

僕は巖さんの講話を聞いて、実際におこったことはこんなにも恐ろしくて悲しい事なんだと改めてよく分かりました。さらに、その後の話によると、本当に一人ぼっちの人が

六千人以上いたといわれているそうです。しかも、その十年後、巖さんに放射線の影響で白血病になってしまい、癌が見つかったそうです。ですが、何度も治療したおかげで治ったそうです。しかしそれは、完全にというわけではないそうです。

直接的ではなくても、放射線による後遺症など、原爆はとても恐ろしい物です。ですから、今後絶対に作ってはいけないし使ってもいけないとよく分かりました。今回の体験は、本当にとってもためになりました。

広島で学んだこと

会津若松ザベリオ学園中学校 曾我 由芽子

今まで私は、広島原子爆弾投下について深く考えた事はありませんでした。しかし、八月四日から三日間で実施された「中学生による広島市訪問事業」に参加した事によって原子爆弾投下の恐ろしさや、生きている事の幸せさを感じたり、今まで考えた事のないような事を考えたりする事ができました。また、以前とは物事の考え方も変わりました。

印象に残ったのは、平和記念資料館に行った事です。そこには、原子爆弾による負傷者の写真や、被爆でボロボロになった制服、原子爆弾が投下された八時十五分で止まっている腕時計など、当時の状況を生々しく物語っている被爆者の沢山の私物が展示してありました。当時の情報と写真や映像が沢山展示してあり、中学生の私達には受け止めがたい物もありましたが、日常では経験ができないような事を経験できたので良かったです。

また私達は、平和祈念式にも参加させていただきました。滅多に経験ができないので、本当に良い思い出になりました。

今回私達は、三日間を通して様々なことを学びました。今回学んだ六十六年前の広島原子爆弾投下の恐ろしさを、今度は私達が沢山のの人に伝え、戦争などの争い事のない平和な社会を造っていきたいです。そして広島で学んだ事を生かし、普通の生活が出来ている事に感謝して生活していきたいと思います。

今回、貴重な時間を与えて下さった会津若松市役所の方々や関係者の皆さん、ありがとうございました。

感想

福島県立会津学鳳中学校 安西 葵

三日間、心に残る驚きばかりでした。初日の宮島、三日目の式典はもちろんですが、一番印象的だったのは二日目です。

初めて見た本物の原爆ドームは、ボロボロで、とても可哀そうだと思いました。惨禍の記憶として保存していくのは大切ですが、取り壊してあげたいと思いました。

平和記念資料館は最も強く印象に残った場所です。八時十五分で止まった時計、ケロイドの標本、ボロ切れの学生服、見る物すべてが衝撃的でした。なかでも、原爆投下直後のジオラマを見て息を呑みました。全身の皮膚がドロドロの裸体が廃虚を歩く様子に、吐き気さえ感じるほどでした。まるで水を求める声が聞こえるような感覚です。脳髄に直接訴えるような彼らの悔しさ、やるせなさ、悲しみ、怒りの感情で胸が締めつけられそうでした。

心が痛む詩もありました。

「壁に挑む母親には火が襲いかかる

倒壊した家の下にアア・・・

娘は生きているものを、母は助け出す穴をついに作れなかった」

我が子が目の前で苦しむのを見捨てなければならなかった母親のつらさは計り知れません。

その日の午後の講話も心に残りました。八月六日の広島で、人々は苦しみのあまり「殺してくれ」と叫んだそうです。中西さんはその日の夜を「地獄の夜」と表現されました。

この三日間の体験は、感じたことが多過ぎて、心の容量を越える程でした。原子爆弾について、平和について、改めて考え、原子爆弾はこの世に必要無い兵器だと思いました。

「地獄の夜」を繰り返すことがあってはならないと思います。その為の一步として、今回の体験をつなげていきたいと思います。